京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

小津安二郎映画の欧米における批評的受容に関する研究

Studies of the critical reception of Yasujiro Ozu’s films in the Occident

2. 研究代表者氏名

正清　健介

Masakiyo　Kensuke

3. 研究期間

2020 年 4 月-2021 年 3 月(1 年目)

4. 研究目的

本研究の目的は、小津安二郎映画が英国で公開された 1957 年から、米国の D.ボードウェルが『映画の詩学』を発表し小津研究がピークを迎える 1988 年までの欧米における小津受容の実態を当時の映画批評の考察を通して明らかにすることである。

小津研究は既に多くあるが、その殆どは 1970・80 年代の研究に代表される作品研究である。しかし本研究は、作品が歴史的にどのように受容されたかを明らかにする受容研究であり、中でも欧米での受容に着目する。このような受容研究は、生前の小津の国際的評価の低さもあってか未だ進んでいない。またそもそも、本研究が考察対象とする欧米の小津映画批評の殆どは未邦訳であり、その存在自体が日本では知られていないという現状がある。本研究は、その未だ手付かずの小津批評を今回初めて網羅的に調査・考察しようと試みる点で有意義であり、小津作品の最初期の国際的評価を新たに提示するものとなる。

The purpose of this study is to analyse film criticism in order to shed new light on the reception of Yasujiro Ozu’s films in the Occident, from 1957 when his crowning achievement Tokyo Story (1953) was shown in London for the first time through to 1988 when the American film historian David Bordwell wrote Ozu and the Poetics of Cinema (1988) - the definitive work on Ozu’s films in English.

Although there are many studies of Ozu’s films, almost all of them, especially 1970s-’80s works, consist of analysis of both the narrative and the cinematic textuality of the films. In contrast, this study is a study examining how Ozu’s films were received historically overseas, especially in the Occident (the United States, England, and France). Such historical

reception studies of Ozu’s films have not been carried out before because of Ozu’s lag in terms of overseas popularity. Also, since Western criticism of Ozu’s films has not been translated into Japanese, it is almost unknown in Japan. This study intends to analyze this previously untouched Western criticism for the first time, thereby highlighting the beginnings of international appreciation for Ozu’s cinematic art.

5. 研究成果の概要

研究成果の概要は次の通りである。

・仏語圏

フランスの映画批評誌『カイエ・ドゥ・シネマ』において 1960 年代から 80 年代にかけて小津映画を対象とした主な批評（作品評）は 8 本あった。その特徴は、作品と「日本的なもの」との関連を否定した上で、映画スタイルの独自性を主張するものだった。論は、映画の映像と音声の構成をめぐって展開する傾向にある。また新聞『ルモンド』において 1960 年代から 80 年代にかけて小津映画を対象とした主な批評（作品評・作家評）は 6 本あった。その特徴は、作品と「日本的なもの」あるいは小津個人のエピソードとの関連を指摘すると同時に、テーマ（家族愛など）の普遍性を主張するものだった。論は、物語とテーマをめぐって展開する傾向にある。以上のフランスの小津映画批評は、1980 年代の小津映画研究に大きな影響を与えていると推察される。

一方、映画批評誌『ポジティフ』では、1960 年代から 80 年代にかけて、小津安二郎の映画に関する批評は 8 本あった。 批評の特徴は論者によって様々だが、作品の物語に沿うのではなく、そこから抽出したテーマを中心に論じている点にある。そこでは主に、①制限や抑制、礼儀作法といった、論者らが保守的＝東洋的なものとして定義するもの、 ②東洋と西洋、大人と子どもといった二項の対立構造、③そうした対立構造の一方から他方への移行や、そこに現れるズレや逸脱に目を向けるもの、などがテーマとなっている。

・英語圏

アメリカでは、1950 年代末から 80 年代にかけて、『Film Criticism』『Film Quarterly』などの学術雑誌に小津映画に対する批評がみとめられる。その初期には、ドナルド・リチーが主に『Film Quarterly』において小津の紹介、批評を行っており、アメリカにおける小津の周知、議論の活性化に貢献したと考えられる。

イギリスに関しては、映画雑誌『サイト&サウンド』を対象に、1957～1988 年の範囲で小津安二郎に関する批評的言説を調査した。小津の名前に言及している号は 66 号、言及のあるページ総数は 153 ページに及ぶ。「日本的な監督」というステレオタイプに基づいた紹介が多く見られるなか、詳細なテクスト分析に基づく本格的な小津論も確認された。そのうちの何本かの記事は、日本語に翻訳して刊行する価値があると思われる。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

なし

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究は 2021 年 3 月に終了するが、それ以降、4 人の班員それぞれは、研究期間中に得た研究成果を論文ないし研究ノートとして公表する予定である。その発表媒体は、4 人の班員が所属する学会（日本映画学会、表象文化論学会、日本映像学会等）の学会誌、もしくは所属研究機関の紀要・機関誌になる。

今後の展開としては、今回の研究で対象とした欧米の小津映画批評のいくつかを班員自ら邦訳し、「欧米小津映画批評集」として集成し、共訳書として刊行することを目指したい。